

フランス語における動詞派生名詞について

— 先行研究の再検討と未解決の問題 —

今田良信

0. はじめに

本稿は、筆者がこれまで検討を加えてきたフランス語における動詞語幹名詞¹⁾を含めた動詞派生名詞²⁾に関する諸問題について、拙論(1988)³⁾を節目にして先行研究に再検討を加え、得られた結果を整理し直し、今後解明すべき未解決の問題点を洗い出すことを目的としている。

1. 拙論(1988)に至る先行研究と得られた結果について

フランス語の語形成に関しては、これまで多くの研究がなされているが⁴⁾、筆者は、それらのうち、拙論(1988)において、古フランス語と現代フランス語の間で動詞語幹名詞を含めた動詞派生名詞全体を比較する通時的考察を行った。この論考は、

(1)現代フランス語における動詞語幹名詞を、それ以外の動詞派生名詞とともにできる限り網羅的に調査・収集し、その実態を共時的に記述すること

(2)その結果を、原野(1976)⁵⁾に示された、古フランス語における動詞語幹名詞およびそれ以外の動詞派生名詞の共時的分布状況と通時的に比較し、①現代フランス語において動詞語幹名詞がどの程度衰退しているのか⁶⁾、②それ以外の動詞派生名詞を形成する接尾辞の生産性の盛衰はどうなっているのか⁷⁾、③不定詞の語尾型別による動詞語幹名詞および動詞派生名詞の語形成上の難易度の差はどう変化しているのかを実証的に調査すること

を目的としたものであった。

その結果のうち、(1)についてはここで詳しく提示することはできないので、拙論(1988)の当該箇所を参照していただきたいが、それ以外の問題点については、結果を少し整理して示しておきたい。まず、次ページの〔表Ⅰ〕をご覧ください⁸⁾。これは、動詞語幹名詞と接尾辞別の動詞派生名詞について、古フランス語と現代フランス語のデータを比較した表である。

まず、(2)の①については、この表から次のような点が指摘できよう。すなわち、

〔表I〕

古 フ ラ ン ス 語			現 代 フ ラ ン ス 語		
順 位	接尾辞	用例数 (割合)	順 位	接尾辞	用例数 (割合)
1	-ement	832(26.2%)	1	-age	1364(34.1%)
2	DEVERBAUX	732(23.1%)	2	-ment	1315(32.9%)
3	-ance	299(9.4%)	3	-tion	695(17.4%)
4	-eure	216(6.8%)	4	DEVERBAUX	288(7.2%)
5	-tion	153(4.8%)	5	-ure	95(2.4%)
6	-erie	131(4.1%)	6	-erie	88(2.2%)
7	-ail(le)	127(4.0%)	7	-ance	50(1.3%)
—	その他	683(21.5%)	—	その他	102(2.6%)
合 計		3173(100 %)	合 計		3997(100 %)

i) 動詞語幹名詞を見ると、古フランス語では、順位は第2位で全動詞派生名詞に占める割合が23.1% (732/3173例)であったのに対し、現代フランス語では、第4位へと後退し、割合も7.2% (288/3997例)と約3分の1に減少している⁹⁾。

次に、(2)の②について、〔表I〕を見て先ず気づくのは、現代フランス語では、上位7位までの接尾辞を有する派生名詞だけで全体の97.4% (3895例)を占めるのに、古フランス語では全体の78.5% (2490例)しか占めていない点である。動詞派生名詞全体として見れば、古フランス語では現代フランス語よりも多様な接尾辞が名詞派生機能を担っていたことが窺えるが、個別적으로는、次のような点が指摘できよう。

ii) 動詞語幹名詞以外 動詞派生名詞の接尾辞では、何より-ageの躍進が目覚ましい。古フランス語ではこの表にも登場しない第9位で全体に占める割合も3.7% (117¹⁰⁾ /3173例)であったのが、現代フランス語では第1位となり、全体に占める割合は34.1% (1364 /3997例)で、9.2倍 (用例の実数では11.7倍)にもなっている。

iii) -ment は、古フランス語と現代フランス語との間で、第1位から第2位へと順位的には下がっているものの、全体に占める割合では26.2% (832/3173例)から32.9% (1315 /3997例)に増加している。

iv) -tion は、順位が第5位から第3位となり、全体に占める割合も4.8% (153/3173例)から17.4% (695/3997例)と3.6倍 (用例の実数では4.5倍)になっている。

- v) 逆に, -ance は, 古フランス語では第3位で割合は全体の9.4%(299/3173例)であったが, 現代フランス語では第7位で全体の1.3%(50/3997例)で, 割合は7分の1弱(用例の実数では6分の1)に減少している。
- vi) -ure(古フランス語では-eure)も第4位から第5位に下がり, 割合も全体の6.8%(216/3173例)から2.4%(95/3997例)に落ちている。
- vii) -erie は, 順位については第6位のままで変わらないが, 全体に占める割合は, 4.1%

〔表Ⅱ〕

不定詞語尾型		-er 型	-ir 型	-oir 型	-re 型	合計
古 フ ラ ン ス 語	全動詞	2293 74.3% (100%)	381 12.2% (100%)	77 2.5% (100%)	375 12.0% (100%)	3126 100% (100%)
	-ement	591 73.8% (25.8%)	93 11.6% (24.4%)	21 2.6% (27.3%)	96 12.0% (25.6%)	801 ¹²⁾ 100% (25.6%)
	DEVERBAUX	607 83.0% (26.5%)	75 10.2% (26.5%)	7 1.0% (9.1%)	43 5.9% (11.5%)	732 100% (23.4%)
現 代 フ ラ ン ス 語	全動詞	2962 90.9% (100%)	234 7.2% (100%)	1 0.1% (100%)	57 1.8% (100%)	3257 100% (100%)
	-ment	1133 86.2% (38.3%)	174 13.2% (74.4%)	1 0.1% (38.3%)	7 0.5% (3.0%)	1315 100% (40.4%)
	DEVERBAUX	262 91.0% (8.8%)	9 3.1% (3.8%)	1 0.3% (25.0%)	16 5.6% (28.1%)	288 100% (8.8%)

(131/3173例) から 2.2%(88/3997例) へと約 2 分の 1 に減っている。

最後に、(2)の③についてであるが、今度は前ページの〔表Ⅱ〕をご覧ください¹¹⁾。この表からは、次のような点が指摘できよう。

viii) 古フランス語では、-ementの派生名詞を有する動詞総数(801)に占める不定詞語尾型別の動詞数の割合(-er型73.8%, -ir 型11.6%, -oir型2.6%, -re 型12.0%)と全動詞総数(3126)に占める語尾型動詞総数の割合(-er型74.3%, -ir 型12.2%, -oir型 2.5%, -re 型12.0%)とを比べると、数値が非常に近いことが分かる。これは、すなわち -ementは語尾型に関係なく派生名詞を造りうるということである。さらにこのことは、各語尾型動詞総数に対する、-ementによる派生名詞を有する各語尾型動詞数の割合の数値(-er 型25.8%, -ir 型24.4%, -oir型27.3%, -re 型25.6%)が、いずれも全動詞総数(3126)に対する、-ementによる派生名詞を有する動詞合計数(801)の割合(25.6%)に近似していることから支持される。一方、動詞語幹名詞を有する動詞総数(732)に占める語尾型別動詞数の割合(-er型83.0%, -ir 型10.2%, -oir型1.0%, -re 型 5.9%)と全動詞総数に占める語尾型動詞総数の割合とを比べると、-er 型動詞からは造られ易く(+8.7%: 83.0-74.3), その他の動詞では-oir型(-1.5%:1.0-2.5), -ir 型(-2.0%: 10.2-12.2), -re型(-6.1%:5.9-12.0)の順序で造られ難いということになる。

ix) 従って、viii)の結果を現代フランス語における結果と併せて考えれば、-ment については、古フランス語では動詞の語尾型による名詞派生の難易は無かったが、現代フランス語では少し-er 型に付き難く(-4.7%: 86.2-90.9), -ir 型に付き易い(+6.0%: 13.2- 7.2)傾向があると言えよう。また、動詞語幹名詞については、-ir 型動詞からは、古フランス語でも(-2.0%: 10.2-12.2)現代フランス語でも(-4.1%: 3.1 -7.2)派生し難く、-re 型動詞からは、古フランス語では(-6.1%:5.9-12.0)非常に派生し難かったが、現代フランス語では(+3.8%:5.6-1.8)派生し易いということになる。これは、古フランス語から現代フランス語にかけての -re型動詞の急激な(375>57: 7分の1強への)減少に比べて、-re 型動詞から派生した動詞語幹名詞はそれ程(43>16: 3分の1強)減少しなかったことに原因があるように思われる。

2. 拙論(1988)から本稿までの先行研究と得られた結果について

筆者は、拙論(1988)を締めくくるに当たって、残された課題の1つとして、古フランス語に比べ全動詞派生名詞総数と全動詞総数との差がはるかに大きい現代フランス語における¹³⁾、同一動詞から派生した、異なる(或いは同じ)派生接尾辞による複数の派生名詞どうしの意味分担の問題を挙げておいた。

しかし、その後、近藤(1995)¹⁴⁾が発表され、その中では、このテーマが取り扱われている。この論考は、現代フランス語において、同一動詞から派生した、動詞語幹名詞およ

び派生接尾辞-ade, -age, -ment, -tionによる動詞派生名詞を対象として、それらの派生（接尾辞）の組合せ別分布パターンを調べ、さらに同一動詞からの派生名詞の意味分担について分析したものである。例えば、〔表Ⅲ〕¹⁵⁾ をご覧いただきたい。この表は同一動

-ade	-age	-ment	-tion	DEVERVAUX	組合せ数
	○	○			310
	○			○	94
		○		○	74
	○		○		28
○		○			12
		○	○		12
			○	○	8
○	○				7
○				○	4

詞から2種類の動詞派生名詞を派生する場合の組合せの種類とその派生の組合せを有する動詞数を示したものである。すなわち、同一動詞の語幹から-ageと-mentによる2つの派生名詞が造られる動詞が310例、-ageによる派生名詞と動詞語幹名詞が造られる動詞が94例、-mentによる派生名詞と動詞語幹名詞が造られる動詞が74例、-ageと-tionによる2つの派生名詞が造られる動詞が28例、-adeと-mentによる2つの派生名詞が造られる動詞が12例、-mentと-tionによる2つの派生名詞が造られる動詞が12例、

-tionによる派生名詞と動詞語幹名詞が造られる動詞が8例、-adeと-ageによる2つの派生名詞が造られる動詞が7例、-adeによる派生名詞と動詞語幹名詞が造られる動詞が4例存在することを示している。結果として、5種類の派生名詞から2種類を取る組合せとしては、理論上は全部で10通りが考えられるわけであるが、実際には、-adeと-tionの組合せだけは存在しないという、このような網羅的な調査をしなければ決して見えてこない興味深い点も明らかになってくるわけである。

さらに、この他に、同一動詞の語幹から3つ、或いは4つの派生名詞が派生する場合があり、その場合の組合せの種類とその派生の組合せを有する動詞数についても同様の表が示されている。そしてさらに、それぞれの場合における各組合せの複数の派生名詞間の意

味の分担がどのような分布を示しているかについても判断のつくところまで丹念に調べている。

3. 未解決の問題と考察を進めるに当たっての注意点について

以上、拙論(1988)を含めた先行研究に再検討を加え、得られた結果を整理し直してみた。近藤(1995)において、現代フランス語に関して扱われた、

- (3)同一動詞の語幹から複数の派生名詞が造られる場合の接尾辞の組合せの分布状況
- (4)各組合せの分布パターンにおける派生名詞どうしの意味分担

の問題は、古フランス語においても残された未解決の問題の1つである。古フランス語の辞書を何ページか捲ってみただけで同様の問題が存在することは明らかである。例えば、上記(3)について、資料としてGreimas(1980), pp. 1-2 を見ると、次のような状況が見取れる¹⁶⁾。

〔表IV〕

動 詞	-ement	DEVERVAUX	-ance	-erie	-son	-ine	-ise
aacier	○	—	—	—	—	—	—
aatir	○	○	—	—	○	○	○
abaier(I)	○	○	—	—	—	—	—
abaier(II)	—	—	—	○	—	—	—
abaissier	○	—	○	—	—	—	—
abandoner	○	○	○	—	—	—	—
...

すなわち、同一動詞の語幹から派生名詞が造られる場合、ここに現れている動詞だけでも1つだけのもの2例、2つのもの2例、3つのもの1例、5つのもの1例がある。しかも同じ数の派生名詞を派生する動詞でも、派生接尾辞の組合せはそれぞれ異なっていることが分かる。

ただし、同様の問題を古フランス語で調べる場合には、注意しておかなければならない点が少なくとも2つある。

1つは、本稿2. の冒頭および注13) で触れたが、古フランス語においては、現代フラ

ンス語に比べて、全動詞派生名詞総数と全動詞総数との差が極端に少ないという点である（前者47に対して後者740）。

もう1つは、注11)で言及したが、古フランス語の派生接尾辞-ementについては、同一動詞の語幹から2種類の-ement名詞を派生する場合があるという点である。

従って、古フランス語では、現代フランス語とはかなり事情が異なっていることが予想されるが、これまで一度も実証的・網羅的な調査がなされたことがない以上、調べてみる必要と価値はあるものと思われる。そこで、筆者は、本稿は紙幅も尽きてきたので稿を新たにしなければならないが、先ず上述の(3)の問題から明らかにしてみたいと思う。

注

- 1) フランス語には、動詞の語幹(radical)そのままないし語幹に-eのみを付加した名詞がある。例えば、現代フランス語では、accord(<accorder), accueil(<accueillir), combat(<combattre); affiche(<afficher), attaque(<attaquer), boulange(<boulan-ger)などであるが、これらの名詞は、substantifs postverbaux とか substantifs verbaux, 或いはsubstantifs déverbaux とか、単にdéverbaux などと呼ばれている。また、日本語では、「動詞逆成名詞」「動詞派生名詞」「動詞派生語」「動詞語幹名詞」などと呼ばれている。本稿では、これを「動詞語幹名詞」と呼ぶことにする。なお、これらの用語の出典については、拙論(1988)の該当箇所を参照されたい。
- 2) 注2)で説明した「動詞語幹名詞」に対して、フランス語の déverbaux は、用語の定義の上では、必ずしも「動詞の語幹(radical)そのままないし語幹に-eのみを付加した名詞」だけを指すのではないようである。例えば、Dubois et al. (1973)によれば、この用語は、狭義では前述の「動詞語幹名詞」だけを指すが、広義では、「動詞から派生した(すなわち、接尾辞を付加したものも含む)全ての名詞」を指す。本稿では、この後者を「動詞派生名詞」と呼び分けることにする。なお、déverbaux は前者の意味だけで用いる。
- 3) 参考文献欄を参照のこと。
- 4) このことについては、原野(1976)、拙論(1988)における解説等、参考文献欄に挙げられている文献を参照のこと。
- 5) この論考の「目的は、1)古代フランス語における動詞語幹名詞の豊富さを、他の動詞派生名詞との比較において明らかにする。次に、2)動詞活用型による動詞語幹名詞形成上の難易の差を調べる、の2点である。」(p. 88)となっている。
- 6) Nyrop(1979), III, p. 259 (§ 540), p. 269 (§ 553); Bourciez(1967), p. 196 (§ 191), p. 655 (§ 546)などによれば、動詞語幹名詞は、起源は俗ラテン語まで遡り、ロマンス諸語

全般に亘って見られるもので、フランス語はその中でも特に豊富である述べられている。しかし、フランス語史の上で見ると、古フランス語の時代には豊富であったが、徐々に他の接尾辞を有する動詞派生名詞に取って代われ、現代フランス語の語形成では、この手段は捨て去られたと指摘されている。従って、現代フランスでは動詞語幹名詞の数はかなり少なくなって衰退していることは分かっているが、果してその度合いはどの程度なのか問題であるということである。

- 7) 例えば、Nyrop(1979), III, p. 269 (§ 553)には、「勝利を収めた接尾辞は、-ement, -erie, そして特に-ationである」と述べられているが、本当にその通りなのかという問題である。
- 8) cf. 拙論(1988), p. 311, [表V]を引用したもの。また、資料および調査方法については、pp. 298-300などを参照いただきたい。
- 9) 原野(1976), p. 106 には、「今後の課題」として、「動詞語幹名詞が古代フランス語において非常に豊富であり、例が多いということを見たが、それが現代語ではどのような減少しているかを調べ、現代語と比較することが必要であろう。そうすれば、古代フランス語における豊富さがよりはっきりしてくるに違いない。」と述べられているが、これがその比較の結果である。
- 10) 原野(1976), p. 91によれば、この項目の総数は 121となっているが、これには-ange (-ainge, -enge) が4例含まれている。拙論(1988)の現代フランス語でも、この接尾辞は別扱いしているので、条件を揃えるためにこの4例は差し引いてある。
- 11) cf. 拙論(1988), p. 313, [表VI]を引用したもの。なお、本稿[表II]の各欄の中央の百分率の数値は、右へ見て行けば分かるように、その接尾辞の付いた派生名詞を有する動詞全体に対する各不定詞語尾型別の動詞の占める割合である。例えば、古フランス語の動詞総数(3126)を100%とすると、-er型74.3%, -ir型12.2%, -oir型2.5%, -re型12.0%である。各欄の下側のカッコ内の数値は縦の関係、すなわち各語尾型別動詞総数に対する各接尾辞別の派生名詞を有する動詞数の割合を示したものである。例えば、古フランス語の全 -er型動詞(2293)を100%とすると、-ementによる派生名詞を有する -er型動詞の割合が25.8%ということである。これは言い換えれば、全 -er型動詞の中の25.8%から-ementによる派生名詞が造られているということになる。ただ、原野(1976), p. 94における古フランス語の資料では、動詞語幹名詞以外に語尾型によって分類されている動詞派生名詞接尾辞は-ementと-ance だけであり、さらに本稿[表I]にあるように、現代フランス語では -anceの例の総数は50しかないため、この表では、実際に不定詞語尾型別による派生名詞形成上の難易度の差が比較可能なのは -mentと動詞語幹名詞だけということになっている。
- 12) 本稿[表II]の-ementの合計(801)と[表I]の合計(832)とが一致しないのは、原野(1976), p. 94によれば、「同一動詞に2つ以上の-ementによる名詞が派生している場

合があるからである。」例えば, *marir* という動詞には, *mariment*と *marissement*という2つの-ement派生名詞があり, *acomplir*にも, *acompliment* と *acomplissement*とがあるということである。

- 13) 古フランス語においては, 全動詞派生名詞総数が3173, 全動詞総数が3126で, その差47であるのに対して, 現代フランス語では, 前者3997, 後者3257で, その差740であり, 現代フランス語の方が, 16倍近く多い計算になる。そもそも全動詞総数と全派生名詞総数とが異なるのは, 同一の動詞から異なる接尾辞を有する2つ以上の派生名詞(および動詞語幹名詞)が造られる場合があるからである。従って, 現代フランス語では, それだけその事例が多いということになろう。
- 14) 詳しくは, 参考文献欄を参照のこと。なお, この卒業論文は, 当時広島大学文学部文学科言語学研究室の吉川守教授(現名誉教授), 古浦敏生助教授(現名誉教授)ならびに筆者の指導の下に作成されたものである。
- 15) 近藤(1995), p. 33, [表3]を引用したもの。
- 16) 用例を収集する際の動詞派生名詞の意味については, 次稿の調査では詳しく説明するつもりであるが, ここでは動詞が表わす行為そのもの, 行為の結果や種々相を意味するものを「ゆるやかに」(cf. 原野(1976), p. 89) 取り上げてある。

参考文献

- Bourciez, E. (1967): *Eléments de linguistique romane*, 5^e éd., Paris, Klincksieck.
- Brunot, F. (1966-1972): *Histoire de la langue française des origines à nos jours*, Paris, Armand Colin.
- Darmesteter, A. (1891-1897): *Cours de grammaire historique de la langue française*, Paris, Delagrave.
- Dubois, J. et al. (1973): *Dictionnaire de linguistique*, Paris, Larousse.
- Egger, E. (1875): *Les substantifs verbaux formés par l'apocope de l'infinitif*, 2^e éd., Extrait de la *Revue des langues romanes* de 1874, t. VI, Montpellier & Paris.
- Greimas, A.-J. (1980): *Dictionnaire de l'ancien français jusqu'au milieu du XIV^e siècle*, Paris, Larousse.
- 原野 昇(1976): 「古代フランス語における動詞語幹名詞(déverbaux) について」, 『関本至先生御退官記念論文集』(『*広言*』第15号別冊), 創元社, p. 85-106.
- 今田良信(1988): 「現代フランス語における動詞語幹名詞について —— 古フランス語との比較を含めて ——」, 『*広島大学文学部紀要*』, 第47巻, pp. 295-319.

- 近藤愛香(1995): 『フランス語における動詞派生名詞についての一考察 — 派生接尾辞の意味分担について — 』 (広島大学文学部文学科言語学専攻卒業論文), 118 p.
- Lené, G. (1899): *Les substantifs postverbaux dans la langue française* (Thèse pour le doctorat présenté à la Faculté des Lettres d'Upsala), Upsala.
- Meyer-Lübke, W. (1913): *Historische Grammatik der französischen Sprache*, Heidelberg, Winter.
- Nyrop, C. (1979): *Grammaire historique de la langue française*, I – VI, Repr., Genève, Slatkine.
- 高田晴夫(1985): 「17. 派生と合成」, 『フランス語学の諸問題』 (東京外国語大学グループ《セメイオン》著), 三修社, pp.233-241.
- (1998): 「20. 合成法の占める位置と役割」, 『フランス語を考える — フランス語学の諸問題Ⅱ』 (東京外国語大学グループ《セメイオン》著), 三修社, pp.233-241.
- Thiele, J. (1987): *La formation des mots en français moderne*, Presses de l'université de Montréal.